

## 緩目さんありがとうございました

柴崎清登 (野辺山太陽電波観測所)

緩目さんの突然の訃報に接したのは3月27日でした。亡くなられたのは24日で、既に親族の方々による密葬がとりおこなわれた後でした。お別れ会が6月17日に東京會館で開催され、120名におよぶ多くの友人や仕事関係の人々が集い、在りし日の緩目さんを偲びました。緩目さんは12年前に国立天文台を定年退官され、定年退官パーティーが開催されたのが同じ東京會館で、しかも1日違いの6月18日のことでした。

緩目さんとのつきあいは、私が愛知県の豊川にありました名古屋大学空電研究所で大学院生としてすごしていた頃に始まり、その後緩目さんのいた太陽電波部門に助手として採用され、以後ずっと同じ研究室で太陽電波の研究をしてきました。緩目さんは東大天文の出身ですから理学部、一方名古屋大学空電研究所は大部分が工学部の電気関係の研究所で、雷の研究が主なものでした。当時の工学部と理学部の間には価値観の大きなギャップがあり、その中で電波天文学をやろうというのでずいぶん苦勞をされたのではないかと思います。しかし、緩目さんは議論にはめっぽう強く、相手を言い負かすことが多く、そのために多くの敵をつくってきたように思います。私も何度もそのような現場に居合わせてひやひやした経験があります。

その頃から空電研究所の将来計画の議論が継続して行われており、工学系と理学系でやり方がまったく異なり、緩目さんは若手として議論をリードしておられ、工学系の先生方とはずいぶんやりあっておられました。最終的に太陽電波部門は1988年の国立天文台の発足の際に電波ヘリオグラフ装置をつくるために、部門ごと野辺山の太陽電波のグループといっしょになり、1990年と1991年のたった2年で完成させ、92年から

は太陽の定常観測を行うという離れ業をやったのけました。この大事業ができたのは緩目さんのキャラクターがあったからこそと思っています。

名古屋大学からポスト付きで1部門を国立天文台に出すというのは普通に考えるとまずできません。もちろんその当時の大学の上層部の理解があったからこそですが、その上層部を動かしたのが緩目さんのリーダーシップです。さらに、100台近いアンテナと受信機、それに建物、計算機等、メーカーの人たちを巻き込んで実行できたのは緩目さんのリーダーシップのたまものと思っています。もちろんその中には大げんかが何度もありました。2つのグループが一緒になるというのは、それぞれもっている文化が違うのでさまざまな面でお互いに不満が出てきます。しかし、同じ目標を持っていたので乗り切ることができました。完成した電波ヘリオグラフ装置はその後20年経過していますが、現在もすべて順調に動作し、太陽の観測を続けています。完成後世界トップの座は他に譲り渡していません。世界中の太陽電波研究者が野辺山のデータを使って研究を行っています。

太陽電波分野というのは電波望遠鏡を用いて太陽の研究をする分野ですが、太陽物理学という分野と電波天文学という分野がそれぞれあり、我々はその間にいます。つまりどちらの主流でもないわけです。緩目さんがよく口にしていた言葉に、「ニッチ」というものがあります。「隙間」という意味ですが、よくいうと学際ということになります。緩目さんはこのニッチをつらぬいてこられたのでは



1



2



3

- 1 電波ヘリオグラフシンポジウムにて (1990年)。
- 2 中国で開かれた研究会でのひとこま (1992年)。
- 3 電波ヘリオグラフ完成記念式典にて (1992年)。

ないでしょうか。工学系の空電研究所で電波天文学をやり、そしてそれが太陽と電波、天文と地球物理の間というわけです。いつも主流派ではなく、谷間で特徴のある仕事をするというスタイルの人生ではなかったかと思えます。しかしそこで主張を通すには緩目さんのような強いキャラクターが必要です。我々にはとてもまねはできません。現在の環境をつくってくださった緩目さんに感謝し、国内外の研究者とともに、さらに成果を出していくのが残された私たちの仕事だと思っています。

緩目さんありがとうございました。